

実践事例 ①

語りや描写に着目した課題発見・解決型の学習を

「スーホの白い馬」(2年)

秋田大学教育文化学部附属小学校 京野 真樹

1 語りや描写に着目する意義

子どもの「考える力」「吟味する力」「意見を述べる力」を育てるには、物語の語りや描写表現に着目する課題発見型の学習が有効である。語りや描写は、語り手あるいは作中の人物の思考や認識の在り方が内在した表現形式である。したがって、語りや描写をたどっていけば、どの物語教材においても、ほぼ間違いなく人物の認識の変容を追うことになる。そこに、人間としての本質や特徴が如実に表れているからである。

物語の語りや描写の中には、人物にとっては当然の成り行きであっても、読み手である子どもや教師には、どこかひっかかる言動や考えが隠れている。そのひっかかりを深く掘り下げ、課題を明確にすることで、子どもの思考力が育つ。一見矛盾している人物の言動に、一貫性のある人物形象を読み取ることは、非常に論理的な思考を必要とするからである。

「スーホの白い馬」(二年下)の実践を例に、その実際について述べてみたい。

2 語りに潜む形象性を浮き彫りにする

「スーホの白い馬」の冒頭では、スーホの人となり語られている。その部分を読んでいた二年生のある子どもが、ふと、こんなことをつぶやいた。

「どうしてスーホは、飼っている羊を追いかけるの?」

ること、そのため遊牧民が非常に多く、過酷な割に実入りが少ないうえ、羊の皮で作ったテントを組み立てて移動生活を送っていること、したがって、一日の仕事の大半が羊や牛の世話であり、草原の遙か遠くまで食料となる草を求めてそれらを連れて行き、十分に腹を満たして、夕方薄暗くなった頃に帰宅することなどを話して聞かせた。

こうして説明をすると、子どもたちは、次第に次のようなことに気づくことになる。中国の北の方、モンゴルには、広い草原が広がっています。という文には、広い草原を一人の少年が二十頭の羊を追って歩くことの過酷さが潜んでいること。ひつじや牛や馬をかって、と言っても、ペットのようには飼うのではなく、毛を刈ったり、乳を搾ったり、食用にしたりするための大変な世話が必要で、だからこその年とつたおばあさんとぶたりきり、では、その仕事のほとんどをスーホがしなければならぬという現実。

こうして話をしてから、「こんなに仕事があるんだけど、おとなにまけない」と思いつ、「と尋ねると、全員が首を横に振った。おとなにまけないくらい」とは、実は大人に匹敵はしても、決してそれ以上ではないときに、健闘を讃えるべく使う言葉なのだ。つまり、どんなに頑張っても、大人には勝てないから、ますしいのである。

二年生の子どもたちは、一文一語にスーホの過酷な暮らしをかいま見た。ますしいということが、より切実に感じられたのである。「たった一つの文に、あんなにたくさん意味があったなんて。言葉ってすげえって思いました。」とふり返った子どももいた。

教師である自分も、一瞬この子の言っていることの意味がわからなかった。どういふ意味が問い返すと、その子は「逃げた羊を追いかけてるの?」とさらに尋ねてきた。ようやくこの子の言わんとしていることが理解できた。つまり、この子は、遊牧民の生活そのものを理解していなかったたのである。まだ初読の段階で、場面設定や時代背景について何ら説明していなかったから、なおさらのことだろう。

逃げた羊を追いかけているのではないことを告げた後、他の子どもたちに、本当のところを説明できる者がいるかどうかを尋ねてみた。驚いたことに、四十人近くいる子どもたちの中で、「説明できる」と答えた子は、わずか三名であった。

そこで、冒頭の語りの部分(物語の初めから、スーホのうつくしい歌声は、草原をこえ、遠くまでひびいていくのだった。まで)の中で、「変だな。どうしてかな。」と思えるところがないかを尋ねてみた。すると、「少年なのに、おとなにまけないくらい、よくはたらいたのはなぜか。」とか「なぜ おばあさんとぶたりきり でくらしているのか。」など、素林ではあるが、質の高い問いが出てきた。中でも、鋭かったのは、「おとなにまけないくらい、よくはたらいたのに、ますしいのはなぜか。」という問いであった。貧しい理由は、冒頭部分に数多く見つけることができる。

しかし、二年生の子どもたちには、見つけることができず、できない場合もある。こうした場合、物語の背景について説明する必要がある。例えば、モンゴルという国の風土について、草原と砂漠が国土のほとんどを覆っている

3 人物描写に矛盾を発見することで育つ吟味力

子どもたちが、一文一語に隠れた人物形象の豊穡さを感じるようになる、人物の言動の意味を考えるために、言葉の根拠にするようになる。常に、「そう考えた証拠は?」「どこに、それがわかる言葉があるの?」と問い返すことで、一文一語を根拠として、論理的かつ豊かに人物の考えを想像する学習習慣がついてくる。

「おとなにまけないくらい、よくはたらいたのに、ますしいのはなぜか。」という問いが優れていたのは、冒頭部の言葉を根拠にしなが、想像力を働かせることができた点にある。そして、もう一つ重要な点は、語られた二つの言葉に矛盾があることに気づいたことである。人物形象というのは、こうした一見矛盾する描写の関係性から浮き彫りになるものである。

例えば、仲間の勧めで競馬に出ることになったスーホが見事優勝したにもかかわらず、とのさま から、「おまえには、ぎんかを三まいくれてやる。その白い馬をここにおいて、さっさと帰れ。」と言われ、かっとなる。スーホは心優しく、働き者で、無欲な若者だと、二年生の子どもたちは考えている。だから、よく考えてみると、スーホがここで、かっとなるのはおかしい。なぜなら、競馬で勝ったことに対する見返りなど、スーホが望むはずがないからである。

それなら、いったい「スーホは何に対して、かっとなるのか。」これが、スーホの人物形象を際立たせる上で非常

に重要であり、学習全体を貫く最重要課題になる。

この課題に対し、子どもたちは、実に多様に理由を考え
た。それらは、おおむね次の四種類の解釈に分類される。

精魂込めて世話をしていた白馬を軽々しく扱ったから。

兄弟のように大切な白馬をよこせと言われたから。

娘のむこうにするという約束を知らないふりをされたから。
銀貨を三枚しかもらえないから。

どの解釈が最も妥当かを、文章中の言葉を根拠に考える
場を設けた。四種類の解釈について、それぞれ、どうして
そう言えるのか、どこに証拠があるのかの問い返しを繰り返して
返していく。すると、おまえには と軽蔑したようなと
のさま の呼び方や、ぎんか はくれても きんか をく
れようとしてないこと、 くれてやる という言葉から、白
馬を買い取るのではなく、あくまでも貧しい者への施しと
して銀貨をやることにしたことを証拠として見つけ出
すようになった。そして、わたしは、けい馬に来たのです。
という言葉が決定的な証拠となって、スーホは妃や賞金が
ほしいのではなく、競馬に勝ちたかったこと、自分が育て
た白馬への称賛がほしかったのだということが明らかにさ
れていった。

このように、教材の中で、最も核となる描写から、人
物のものの見方や考え方の典型が見えてくる部分に着
目し、学習課題とすることが、子どもの文章吟味を、よ
り論理的で想像力に富むものにしていくことができるの
である。

4 一般化のための話し合い活動

さて、文章吟味力を育てるうえで、話し合い活動は非常
に重要な意味をもつ。この授業では、相対する四つの解釈
に対して、誰がどの解釈を支持するかという判断を、必ず
全員に迫ることから始めた。これは、間違いなくどの子ど
もも文章吟味の入り口に立つために、必要な段取りである。
そのうえで、文章中から必ず一つ以上は根拠となる言葉や
文を見つけてというノルマを課す。ここまでは、幾度か経
験を積み、友達の事例などに学びながら、誰もができるよ
うになる。

しかし、誰がどの言葉を根拠に、それにどんな意味づけ
をしたのかを比較し、最も妥当な解釈を発見するための話
し合いは、子どものみならず、教師にも難しいことである。
実に創造的なこの類の話し合いを解決に導く一つの方法が、
一般化の作業である。

一般化には、二つの方法をとることが多い。一つは、妥
当とされる解釈を特定し、教材文中の他の部分との整合性
を検証する方法、もう一つは、仮にある解釈が正しいとし
て、それが他の場面にも通用するかどうかを検証する方法
である。後者は、複数の解釈から、妥当だと思われる一つ
の解釈に話し合いが収斂していかないとくに用いる。

「スーホは、金貨がほしかったわけではないよ。なぜな
ら、馬を育てるのはとてもお金がかかることだけど、貧し
くても白馬を 心をこめて世話 していたもの。」というよ
うに、一つのことを論証するために、検討されている部分

以外の解釈を援用するのが、一般化のための発言の基本形
式である。

従来の読みの授業における話し合い活動は、何か一つの
「正解」が暗黙の了解となっていて、そこに意味づけをする
ために意見を述べるが多かった。あるいは、子どもた
ちがめいめいに意見を述べるが、それらを整理したりまと
めたりして妥当な解釈にたどり着く
ために、教師が半ば強引にまとめて
しまうことも少なくなかった。

これでは、子どもたちの思考力は
育たない。結論までたどり着く思考
の在り方を、子どもたち自身が表現
できなければならない。そのために
も、解釈の一般化を志向した発言の
しかたを身につけることが、意見を
述べる力を育てることにつながるの
である。

